

コラージュ作品と性格特性の関係： 表現特徴とエゴグラムパターンの検討

Relationship between Collage Works and Personality Traits: Investigation into Characteristics in Its and Egogram Patterns

奈良学園大学人間教育学部
岡村 季光
OKAMURA Toshimitsu
Nara-Gakuen University
Faculty of Education for Human Growth

奈良保育学院
吉野 さやか
YOSHINO Sayaka
Nara Teachers College of Early Childhood Education

キーワード：コラージュ作品，エゴグラムパターン，心理アセスメント

Abstract : An application of collage as an art form has been made in clinical psychology, and has been established as collage therapy. The purpose of this study is to investigate the relationship between personality traits and characteristics in collage works. 382 vocational college students were asked to fill Egogram (TEGII) and collage works. The result indicated that Egogram patterns were different in the number of cuttings used in the piece, area of blank, and satisfied of collage works. These findings suggest that collage therapy may be a useful tool for psychological assessments.

Keyword : Collage works, Egogram patterns, psychological assessments

問題と目的

1. コラージュの歴史

1-1 美術史におけるコラージュ

コラージュ“collage”とは、フランス語で「貼りつけること」を意味する“collé”から派生している。

現代美術の重要な表現技法としてのコラージュは、ピカソ (Picasso, P., 1881-1973) やブラック (Braque, G., 1882-1963) が、新聞紙や楽譜、壁紙、切符、レッテルなどの紙を自由に組み合わせる「パピエ・コレ」(papier collé; 貼り紙) という技法によって作品が制作され、後にコラージュと呼ばれるようになった。これ

らの発展は、「総合的キュビズム」(1911-1916)として知られている(入江, 1993)⁽⁵⁾。コラージュ技法はシュールレアリスム(surrealism; 超現実主義)の絵画の手法として1920年代からつねに利用された表現技法であり(徳田, 1993)⁽¹⁷⁾、パピエ・コレから発展したキュビズム的コラージュの流れと、マックス・エルンスト(M. Ernst, 1891-1975)に代表されるシュールレアリスム的コラージュの流れを発展させた(山本, 2008)⁽²⁰⁾。

コラージュ技法は当時最新の精神分析理論の影響のもとに、写真や、商品のカタログ類といった印刷文化の産物を素材とした組合せ表現を試みて、文字どおり

超現実的な絵画作品を生み出し、現代芸術に広範な影響を及ぼした（佐藤, 1998）⁽¹³⁾。

1-2 心理臨床におけるコラージュ

美術分野に端を発したコラージュが心理臨床場面に登場するきっかけは、あまりはっきりとはしていない。森谷（1993）⁽¹⁰⁾によると、“collage”という語源が見られたのはLipkin（1970）⁽¹²⁾とされる。Lipkin（1970）は、想像的なコラージュと心理療法上の応用について、想像上のコラージュは、絵を描いたりするよりも、外的刺激に拘束されずに、患者が自分自身の内界に従って生産するので、好都合であると述べている。また、雑誌などの切り抜きをもとにするコラージュ療法をテーマにした早期の論文としては、Buck & Provancher（1972）⁽³⁾が挙げられる（森谷, 1993）⁽¹⁰⁾。

日本では、1987年に森谷寛之が、箱庭療法の設備がない場所で箱庭と同様の効果を得るにはどうすればよいのか、という目的から出発した。友人と雑談している中で思いつき、早速に実施して、同年12月に東海精神神経学会で発表し、その抄録が1988年5月に精神神経学雑誌に掲載されたのが始まりとされる。アメリカで始まった精神障害者の評価法として生まれ、作業療法として発展してきた前述のコラージュ療法とは同じ名称であるが、その内容は異なっている（山本, 2008）⁽²⁰⁾。

2. コラージュにおける実証的研究

心理アセスメントの材料としてコラージュ療法を発展させていくためには、臨床場面での経験的知見の蓄積に加えて、一般人を対象として、作品の表現特徴とそれを規定する制作者の特性との関係を定量的に把握していくことが必要であると考えられる（宮澤, 2004）⁽⁹⁾。

先行研究では、特に作品中に使用された素材図版の枚数（切片数）とパーソナリティの関連を検討した研究が多い。宮澤（2004）⁽⁹⁾は、コラージュ制作における表現特徴および行動特徴と性格特性との関連について、切片数とNEO-PI-R人格検査の下位次元30尺度のうち、N6（傷つきやすさ）、A5（慎み深さ）との間に有意な負の相関を示した。また、佐藤（2002）⁽¹⁴⁾は切片数と矢田部・ギルフォード性格検査の関連について、切片数とG（活動）、R（気軽）、A（支配）、S（社会的向性）の各尺度得点の間に有意な正の相関を、D（抑うつ）、I（劣等感）、Co（協調）の各尺度得点の間に有意な負の相関を示した。従って、作品中の切片数は、

作品制作者の情動的適応状態と内向-外向特性を反映する指標であると考えられている（宮澤, 2004）⁽⁹⁾（佐藤, 2002）⁽¹⁴⁾。すなわち、切片数と、神経質、抑うつ、劣等感などの性格特性との間には、負の相関がみられるだろうと推測される。

3. 本研究の目的

上述の先行研究を踏まえると、切片数に注目することで、作品制作者の人格特性が明らかになる可能性がある。また、切片自体の大小の問題はあるが、切片数の大小は作品内の余白にも影響を及ぼすことが考えられる。それらの関連を見出すことで、コラージュ療法の心理臨床におけるアセスメントに有益な示唆を与えることができるだろうと期待される。そこで本研究では、コラージュから得られる多面的指標の中から、特に切片数と余白に着目し、人格特性との関連について検討することを目的とする。また、コラージュ制作における満足度と心的エネルギーには関連があるだろう（青木・金丸, 2008）⁽¹⁾という指摘があることから、本研究では、満足度についても検討する。

人格特性を測定する指標としては、エゴグラムをとりあげて検討する。エゴグラムは、精神分析のエッセンスをやさしく実用化して、交流分析を編み出したエリック・バーン（Eric Berne, 1910-1970）の弟子であるジョン・M・デュセイ（John M. Dusay, 1935-）が考案したものである。彼は、「エゴグラムとは、それぞれのパーソナリティの各部分同士の関係と、外部に放出している心的エネルギーの量を棒グラフで示したものである」と定義し、自我状態の間に流れている心的エネルギーの給付状況をCritical Parent（CP）、Nurturing Parent（NP）、Adult（A）、Free Child（FC）、Adapted Child（AC）の5つの観点でグラフ化することを試みた。その後、ロバート・ハイヤー（Heyer N.R., 1979）が質問紙法エゴグラムを開発した。日本でも1970年代より質問紙法エゴグラムが開発され（岩井ら, 1977）⁽⁶⁾、以降臨床に応用されるとともに急速に普及した（東京大学医学部心療内科, 1995）⁽¹⁸⁾。

コラージュとエゴグラムとの関係について検討した先行研究はいくつかみられる。加藤・森田（2007）⁽⁷⁾は、表現領域とFCの間に有意な相関を認めており、FCの高い者は創造性の高さや自由にあふれるまうことのできる特性が影響しているだろうと示唆している。近喰（2000）⁽⁸⁾は、コラージュ制作前後とエゴグラムとの

関連について検討し、コラージュ制作後にマイナスの気分の減少及び活気の高まりが比較的顕著に表れた群は、AとFCに有意な得点の上昇がみられることを示した。山本・野村・中村・北川・竹下・北川・近喰(2006)⁽²¹⁾は小学5,6年生及び中学2年生を対象として、コラージュ作品を「攻撃的」と「非攻撃的」のいずれかに評定し、それらとエゴグラムとの関連を検討したその結果、中学2年生において、表出性攻撃ではFCと正の相関、NPでは負の相関が、不表出性攻撃ではACに正の相関がみられることを示した。

しかし、いずれの研究においても、エゴグラムを下位尺度ごとの検討にのみ用い、エゴグラムパターンからコラージュ作品との関連を検討している研究は見当たらない。エゴグラムを解釈する際、各下位尺度間の相互関係をみることにより、個人の自我状態をより包括的に理解することが重要である(東京大学医学部心療内科,1995)⁽¹⁸⁾。そこで本研究では、エゴグラムパターンに分類した上で、切片数、余白及び満足度との関連について検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

2006年度～2013年度に近畿圏の保育専門学校に所属していた1回生382名(男子31・女子351)であった。調査時における年齢は、平均18.95歳(SD2.43, 範囲18歳～47歳)であった。

2. 調査内容

2-1 調査対象者が用意した材料

a) はさみ, b) のり, c) 雑誌・パンフレット等の印刷物であった。なお, c) については調査前に「自分が普段読んでいる雑誌で、気になるものが掲載されており、切り取っても良いものを持ってきてください」と教示した。

2-2 調査者が用意した材料

a) 4切判白画用紙1枚(台紙), b) コラージュ実施後に切片数、余白及び満足度を記入する用紙, c) 新版東大式エゴグラム(TEG II), d) 雑誌約100冊程度。なお, b) の満足度は“⑤とても気に入っている”“④まあ気に入っている”“③ふつう”“②あまり気に入ってない”“①全然気に入ってない”の5件法であった。c) は53の質問文が並んでおり, CP, NP, A, FC, ACの

下位尺度の他, 妥当性尺度(L)及び疑問尺度(Q)で構成された。選択肢は“はい”“どちらでもない”“いいえ”の3件法であった。d) の雑誌のジャンルは, 調査対象者の性別・年齢・志向を考慮し, ファッションカタログ・雑誌, グルメ等の特集が掲載されているタウン情報誌, ウエディング雑誌, 音楽・アーティストを取り扱う雑誌, パソコン等電子機器を紹介する雑誌, 国際政治経済を取り扱う雑誌等, 多岐にわたって用意した。

3. 調査方法

3-1 コラージュ実施方法

コラージュは, マガジン・ピクチャー・コラージュ方式を用いた。第1著者よりコラージュの説明を行った後, 「雑誌等の印刷物から気になるものを切り取って, 自由に台紙に貼り付けてください。制作はおおむね60分を目安に終わるようにしてください」と教示した。なお, 台紙への貼り付け方は自由だが, 台紙自体を切り刻む等加工することは控えるように, あわせて伝えた。

3-2 コラージュ実施後の手続き

コラージュ実施後, 前述2-2 b) の用紙に切片数及び余白(まったく余白がない状態が0%～何も貼っていない状態が100%)を記入するように求めた。満足度は“⑤とても気に入っている”“④まあ気に入っている”“③ふつう”“②あまり気に入ってない”“①全然気に入ってない”の中から1つ選択するように求めた。

3-3 TEG II実施方法

質問項目を順に読み, 「自分にあてはまる」時は, “はい”に丸を, 「自分にあてはまらない」時は, “いいえ”に丸をつけるように教示した。なお, なるべく“はい”か“いいえ”のいずれかで回答してほしいが, どうしても決められないときは“どちらでもない”に丸をつけるように教示した。

3-4 留意点等

コラージュ制作及びTEG IIを行うことは義務ではなく, 実施を拒否しても調査対象者には何の不利益も生じないことを伝えた。

結果と考察

1. TEG IIの分析

1-1 TEG IIにおける回答の検討

TEG IIにおいて, 東京大学医学部心療内科TEG研究会(2006)⁽¹⁹⁾は, 妥当性尺度(L)が3点以上である

場合、検査への応答態度に関する信頼性が乏しいと考えられるため、判定には注意を要するとしている。また疑問尺度(Q)が32点以上である場合、判断を保留した方がよいとしている。そのため、Lが3点以上、またはQが32点以上に該当する7名は、以降の分析から除外した。

1-2 エゴグラムパターンの検討

CP, NP, A, FC, ACの下位尺度得点をそれぞれ集計し、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 (2006)⁽¹⁹⁾で示された男女別平均値と標準偏差の値を用いてZ得点を算出した。その後、クラスター分析(K-means法)により、解釈可能な3つのクラスターを抽出した。各クラスターのエゴグラムパターンを図1に示す。

1群はCP, NP, FCが高く、A, ACがほぼ平均であった。エゴグラムパターンではM型に近かった。このタイプは、人に優しく世話やきで面倒見がよいと同時に、陽気にはしゃいで自分も楽しむ傾向があり、面白い人との好感を持たれることが多いとされる(東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006)⁽¹⁹⁾。また、CPが高いため、責任感・正義感が強く、一方でACが低いため、人に頼るといことはあまりせずに、どんどん自分から行動するという独立精神の強い傾向があるとされる(芦原, 1995)⁽²⁾。

2群はNP, ACが高く、FCがほぼ平均、相対的にCP, Aが低かった。エゴグラムパターンではN型Iに近かった。このタイプは、人に優しく世話やきで「No」と言えないため、仕事を頼まれると無批判に引き受け他人に尽くす傾向があるとされる(東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006)⁽¹⁹⁾。また、Aが低いために冷静な状況判断が苦手であるとされる(芦原, 1995)⁽²⁾。

3群はACのみ突出して高く、相対的にCP, NP, A, FCが低かった。エゴグラムパターンではAC優位型に近かった。このタイプは、依存的であり、人に気づかいをして「No」と言えないため、部下として与えられた仕事はこなせるが、自ら先頭に立って何かを成し遂げることは不得手であるとされる(東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006)⁽¹⁹⁾。また、自分の欲求は抑え込み、人にもとても気をつかうが、それは自分に自信がなく、人に受け入れてもらえない不安感や、人の目を過剰に気にすることが原因である可能性が示唆されている(芦原, 1995)⁽²⁾。

2. コラージュ表現特徴とエゴグラムパターンの関係

コラージュ作品の切片数、余白及び満足度とエゴグラムパターンの関係を検討した。エゴグラムパターン群間の平均値及び標準偏差を算出した結果を、表1に示す。

2-1 切片数とエゴグラムパターンの関係

切片数とエゴグラムパターンの関係について1要因分散分析を行った結果、群間に有意な差がみられた($F(2, 372) = 3.57, p < .05$)。1群の方が3群より有意に得点が高く、1群と2群、2群と3群では有意な差はみられなかった。青木・金丸(2008)⁽¹⁾によると、コラージュ作品の切片数が多い者は、心的エネルギーが高い性格特徴を持つ可能性が示唆されており、1群は他の群と比して全般的に得点が高く、心的エネルギーが高いことが特徴といえる。また、FCとACの関係に注目すると、1群ではFCの方がACよりも得点が高く、一方、2群及び3群では、FCはACよりも得点が低かった。従って、台紙に切片を数多く貼るか否かという行動は、性格特性における積極性と関連している可能性が示唆された。

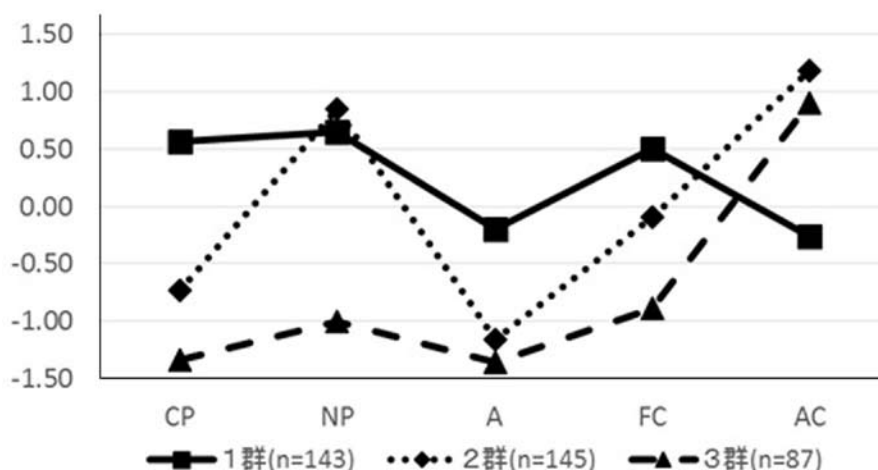


図1 エゴグラムパターン

2-2 余白とエゴグラムパターンの関係

余白とエゴグラムパターンの関係について1要因分散分析を行った結果、群間に有意な差がみられる傾向があり ($F(2, 372) = 2.64, p < .10$), 1群よりも、2群及び3群において有意に得点が高い傾向であった。コラージュ療法において、余白が多すぎることは一般的に何らかの問題があると考えられている(園田・近藤, 2006)⁽¹⁶⁾ ことから、2群及び3群は、1群と比して全般的に心的エネルギーが低い傾向があったとも考えられる。また、ACはPOMS(気分プロフィール尺度)との関連において種々の気分・感情の不安定さと関連があると示唆されている(東京大学医学部心療内科, 1995)⁽¹⁸⁾ ことを踏まえると、コラージュ作品において余白が多い者は、心的エネルギーが低いという性格特徴があり、感情の不安定さと関連しているのかもしれない。

2-3 満足度とエゴグラムパターンの関係

満足度とエゴグラムパターンの関係について1要因分散分析を行った結果、群間に有意な差がみられた ($F(2, 372) = 6.33, p < .01$)。1群及び2群の方が、3群よりも有意に得点が高かった。東京大学医学部心療内科(1995)⁽¹⁸⁾ は、ACと抑うつを評価する尺度の関係について検討した結果、ACと抑うつとの間に正の相関を見出した。すなわち、ACが“自己否定の構え”をとりやすいため、その態度が抑うつにつながりやすいのだろうと示唆している。本研究の結果から、3群は自らを投影したコラージュ作品に“自己否定の構え”をとり、満足度を下げたのだろうと推測される。

表1 コラージュ表現特徴とエゴグラムパターンの関係

	切片数 (枚)		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1群	143	27.89	16.09
2群	145	26.06	13.33
3群	87	22.84	10.49
	余白 (%)		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1群	143	26.23	20.75
2群	145	30.61	20.14
3群	87	31.98	20.76
	満足度		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1群	143	3.89	.90
2群	145	3.82	.87
3群	87	3.46	1.02

3. まとめと今後の課題

本研究の目的は、性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり、387名の専門学校生にエゴグラム(TEGII)及びコラージュ作品制作を実施した。その結果、エゴグラムパターンにより切片数、余白、作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち、1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が、2)余白が多い者は心的エネルギーが低く、依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が、3)満足度が低い者は“自己否定の構え”を持っている可能性が、それぞれ示唆された。本研究の結果は先行研究とも合致するものであり、コラージュ療法における表現特徴が心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすことが示唆された。

今後の課題として3点挙げられる。第1に、杉浦・寺西(2003)⁽¹⁶⁾は素材の統一と台紙の大きさの統一を図った上で、台紙における面積などの比率を出す必要を提案している。また、台紙の面積における切片の大きさの比率を測定するなど、さらに詳細なアプローチによって、性格特徴との関連が明らかになるのではないかと指摘している(杉浦・寺西, 2003)。コラージュ作品において、切片数に注目することは、先行研究並びに本研究の結果から有効であることが明らかになったが、より多くの基礎研究の積み重ねが必要であると考えられる。

第2に、不安傾向の強い人のコラージュには空白がない(過剰)傾向や、特性不安と空白の少なさに弱い正の相関がみられたという報告も見受けられる(園田・近藤, 2006)⁽¹⁵⁾。本研究では、コラージュ作品において余白が多い者は心的エネルギーが低いという性格特徴があり、感情の不安定さと関連している可能性が示唆されたが、あまりに空白がない(e.g.切り抜きを多量に貼る、重ね貼りが多い)場合も検討事項とする必要があるものと考えられる。

第3に、一般人を対象としたコラージュ作品の表現特徴とそれを規定する制作者の特性との関係について、全体的に形式分析及び内容分析の研究数が未だ少ない現状がある。従って、内容の般化については判別がしにくい。また、切片数以外の項目については、一貫した結果が得られていない(杉浦・寺西, 2003)⁽¹⁶⁾ ため、さらなる検討の余地がある。

心理アセスメントの材料としてコラージュ療法を展覧させていくためには、コラージュ作品から読み取る指標の可能性について、今後さらに検討していく必要があるだろう。

引用文献

- (1) 青木いづみ・金丸隆太 高校生のコラージュ作品の形式分析と内容分析 茨城大学教育実践研究 茨城大学教育学部附属教育実践総合センター 編 27, 181-195, 2008.
- (2) 芦原 睦 自分がわかる心理テスト PART2: エゴグラム 243 パターン全解説 講談社ブルーバックス, 1995.
- (3) Buck, R.E. & Provancher, M.A. Magazine Picture Collage as an Evaluative Technique. *The American Journal of Occupational Therapy*, 26 (1), 36-39, 1972.
- (4) Heyer, N.R. Development of a Questionnaire to Measure Ego States with Some Applications to Social and Comparative Psychiatry. *Transactional Analysis Journal*, 9, 9-19, 1979.
- (5) 入江 茂 美術史におけるコラージュ 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編著) コラージュ療法入門 創元社, pp15-25, 1993.
- (6) 岩井浩一・石川中・森田百合子・菊池長徳 質問紙法エゴグラムの臨床的応用 交流分析研究, 2 (1), 3-13, 1977.
- (7) 加藤大樹・森田美弥子 コラージュ技法・ブロック技法における表現特徴とパーソナリティ特性の関連 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 191, 2007.
- (8) 近喰ふじ子 コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果: 日本版 POMS とエゴグラムからの検討 日本芸術療法学会誌, 31 (2), 66-76, 2000.
- (9) 宮澤志保 コラージュ制作における表現特徴および行動特徴と性格特性との関連について 心理学研究, 75 (4), 365-370, 2004.
- (10) 森谷寛之 臨床場面でのコラージュ技法の歴史 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編著) コラージュ療法入門 創元社, pp.26-32, 1993.
- (11) Lerner, C. & Ross, G. The Magazine Picture Collage: Development of an Objective Scoring System. *The American Journal of Occupational Therapy*, 31 (3), 156-161, 1977.
- (12) Lipkin, S. The Imaginary Collage and its Use in Psychotherapy. *Psychotherapy: Theory, Research & Practice*, 7 (4), 238-242, 1970.
- (13) 佐藤 静 1998 コラージュ療法の基礎的研究: コラージュ制作過程の分析 心理学研究, 69 (4), 287-294, 1998.
- (14) 佐藤 静 コラージュ制作者の性格特性と作品特性 心理学研究, 73 (2), 192-196, 2002.
- (15) 園田直子・近藤朗子 コラージュの形式的特徴と自己の関連 久留米大学心理学研究, 5, 13-20, 2006.
- (16) 杉浦京子・寺西孝裕 コラージュ作品の表現特徴に関する研究の動向 日本医科大学基礎科学紀要 33, 15-21, 2003.
- (17) 徳田良仁 序にかえて—コラージュ療法の新しい展開によせて 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編著) コラージュ療法入門 創元社, pp. i-v, 1993.
- (18) 東京大学医学部心療内科 新版エゴグラムパターン: TEG (東大式エゴグラム) 第2版による性格分析 金子書房, 1995.
- (19) 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン 金子書房, 2006.
- (20) 山本映子 コラージュ療法の起源とその発展および看護における現状と課題 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌, 8 (1), 17-24, 2008.
- (21) 山本映子・野村幸子・中村百合子・北川 明・竹下比登美・北川早苗・近喰ふじ子 思春期における児童生徒の問題行動の予防に関する探索的研究: コラージュ法を用いた攻撃性の発見 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌, 6 (1), 45-56, 2006.